

〈研究ノート〉

墓の新築祝い —沖繩本島中部・屋慶名の事例—

前田 一舟

はじめに

沖縄県下における墓は様々な形でみられる。その形は自然的な洞穴や岩陰を利用した墓があったり、近世に流行した亀甲墓や破風墓がみられたり、近年増加しつつあるコンクリート建築の家型墓もみられる。その墓の形態は、近世の琉球の中心地であった首里・那覇より各地へ広がりを見せている〔平敷 1995 : 397-398〕。

特に亀甲墓や破風墓は、琉球の王族層や士族層、役人層でしか造営できなかった。しかしながら、それらの墓は明治時代の廃藩置県を境に百姓層も造営できるようになり、近代より沖縄本島の各地や離島でもみられるようになった。今回報告する沖縄本島中部・屋慶名村落においても同様な傾向が確認できた〔前田 2011b〕。

近世の琉球に流行した亀甲墓や破風墓などは、墓の造営後に儀礼を行なった。それが『四本堂家礼』（1736年、別名『蔡家家憲』ともいう）の「新墓仕立之事」の項で確認できる。おそらく、その儀礼も墓の造営方法と付随して各地へ伝えられた、と推測できる〔窪 1978 : 3-75〕。

今回は、1994年11月20日（旧暦10月18日）の沖縄本島中部・屋慶名村落において参与観察及び聞き取りの調査で得られた第一次資料を中心に報告する（図1、註1）。また、その資料では墓の新築祝いの実態をまとめ、儀礼の特徴を述べたうえで今後の調査研究の課題も提示する。

一、マチカニー・スージー

マチカニー・スージーとは、マチカニーが墓であり、スージーが祝いの意味をさす。住民によっては、「墓の祝い」とか「墓の新築祝い」、または「墓の誕生祝い」という意味合いをもつ。今回は、墓の新築祝いをする家をA家とした。A家は本家の墓から分家し、新たな墓を造営した。そのための新築祝いである。それには、マチカニー・スージー、ハル・ジュウコウ、先祖の移葬の儀礼があり、時系列で以下に報告する。

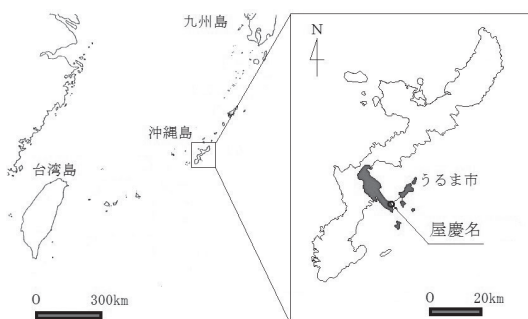


図1 沖縄島・うるま市・屋慶名村落の位置

1、前日の打ち合わせ

墓の新築祝いを始めるA家では、前日の夜9時頃から儀礼に関わる人たちが集まる。儀礼を進行する古老(a氏・男性)は、祝いをする家主(b氏・男性)とその家の老女(c氏)へ供物や道具の準備状況、家族の名前と生まれ年、満ち潮と引き潮の時間などについて確認し合う。とくに家の老女は台所に祀られているウカマガナシー(火の神、別名ヒヌカン、ウミチムンともいう)と仏壇の先祖へ明日の祝いがあることを報告する。

2、火の神と仏壇への祈願

祝いの当日は朝が早い。A家にはサンシン・ヒチャー(地方、三線の演奏者)やウスディーク・アンマー(女性のみが踊る伝統芸能の踊り手)などが集まっている。朝5時30分になると、A家のc氏は、まず台所へむかい、ウカマガナシー(火の神)へ祈願する。c氏は線香に火をつけ、それを白いウコール(香炉)にたて、手をあわせた。そして、c氏は「私たちはマチカニーを買いました。今日はマチカニー・スージーがあります。どうかウカマガナシー(火の神)様よろこんでください。」と述べ、家族の健康や繁栄の感謝を伝え、深々と頭を下げた。

その後、c氏は仏壇へ向かう。そこの位牌の前には、おにぎりやサーターアンダギー、お茶などが供えられている。c氏はA家のウヤファーフジ(先祖)の名前を呼びはじめ、ウカマガナシーと同じ動作と報告の内容を伝えた。今日の喜びを隠せないc氏は、位牌の先祖へ何度も頭を下げていた。

そして、c氏の拝みを終えると、A家の家族やサンシン・ヒチャーやウスディーク・アンマーの方々、新しく購入した墓へと向かった。

3、マチカニー・ウガン

今回の儀礼は、屋慶名村落の南側に隣接する饒辺村落で行われた。その場所の墓地は、現世のマンションやアパートと同じく、一定の区画内に数基の墓が並んでいる。墓の形式は、家型墓である(註2)。

マチカニー・ウガンは、マチカニーの拝みを意味する。参加者は、家族、親類、サンシン・ヒチャー、棒術者、ウスディーク・アンマーたちだけであった。その儀礼は、満ち潮の時間に合わせながら、6時20分頃に始まった。この時期は夜明けなのに、まだ空が薄暗い。その暗闇からウスディーク・アンマーたちが行列となり、「ドン、ドン、ドン・・・」と太鼓をたたきながらやって来る。

本来、祝う家族たちは墓の後ろ側で待機し、ウスディーク・アンマーたちに見られないように隠れていなければならない。その理由は不明である。

(1) ナージケー

墓への祈願を始める前に、新築した墓の墓口が開けられた。まず、墓の持ち主のb

氏たちは、墓の玄室から2つの土嚢袋と六尺棒およびショベルを取り出す。それらの道具は工事中を意味し、自分たちの祖先以外の霊が入らないようにするためである。

そして、進行役のa氏が墓口の前にあらわれる。a氏は墓口の上の方に右手をあて、時計まわりに3回まわしながら「マチカニー、マチカニー、マチカニー」と唱えた。それが墓に対してのナージケー(名づけ)である。つまり、「墓に名前をつけると初めてマチカニーになるわけさ。その前は、ただのコンクリートにすぎないわけ。マチカニーであります。マチカニー、マチカニーと口で言いながら、手をまわすと初めてお墓になるんだが。それは人間でも同じでしょ。赤ん坊に命名するさ。」と、a氏が説明してくれた。

次はサンシン・ヒチャーの3人と棒術者の1人などの出番である。その人たちは、墓にカー(縁起)をつけるため、墓の玄室へと入っていった。本来は、奇数人数の5人か7人で墓の玄室に入るほうが吉とされている。しかし、今回、玄室に入った人たちは4人であった。それは、A家の墓がコンクリート建築で造られているため、昭和初め頃に造営された亀甲墓や破風墓と比べると、比較的墓の内部構造が小さく造られているからだ。

玄室の奥側に座ったサンシン・ヒチャーは壁に背を向け、墓口を正面にした。そして、その3人は「御墓祝の歌」の歌詞をかぎやで風節と恩納節と中城ハンタ前節の曲にあわせながらうたった。それらの節は、屋慶名でミフシ(三節)と呼び、祝いの席で必ず出てくる曲となっている。

ツイチン フィチ チュラシヤ	(土を敷くことは美しいことよ)
イシン モ イシ チュラシヤ	(石も置き積めることは美しいことよ)
フンスイ マチガニヌ	(風水に適したお墓は)
ンケ ヌ チュラシヤ	(お墓の構えが素晴らしいことだ)
フンスイ マチガニヤ	(風水に適したお墓は)
カリユンドウ ヤユル	(縁起が良いことだ)
シタティタル ヌシヤ	(そのお墓を造った主人は)
ムライ サカイ	(栄えることだろう)

その曲が終わり、棒術者が短めの棒をもち、墓の玄室で演武し、カチャーシーも踊った。その後、サンシン・ヒチャーが墓の玄室で酒(泡盛)を供えた。これらのカーをつけ終わると、墓口はいったん閉められた。

ちなみに、墓の玄室に入る人は干支にこだわる。とくに棒術者の生まれ年は、子年生まれが好まれている。a氏によれば、カーをつける棒術者は子年生まれの人が望ましいらしい。それは「干支で最初に数えられる動物がねずみ(子)だから」とか「ねずみは根強いから」などの理由があり、それらをあやかるためだと考えられている。

(2) マチカニーに対する詞章と供物の意味

A家の女性たちは、供物を墓口の手前のゴザシク（莫産を敷く場所。スムイチともいう）に置きはじめた。そして、a氏がウサンミ台の手前にひざまずき、詞章を語り始める。その時の詞章とは、マチカニーと名づけられた墓に対して、祝いの日、A家の家族状況、供物の意味を教えるための内容であった。儀礼を進行するa氏は、マチカニーへ供物（図2）を次のように説明する。

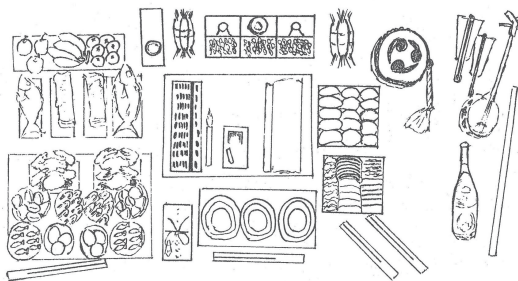


図2 マチカニーに対する供物

①海・山・揚げの物

マチカニー（墓）には必ず海の物と山の物と揚げの物を供物として差し上げなければならない。海のものでは、蟹やエビ、貝、アイゴの稚魚を供える。山の物では、バナナ、みかん、りんごなどの幸を供える。揚げ物は、焼き魚や豚肉、重箱（蒲鉾、ゴボウ、豆腐、豚の三枚肉、魚の天ぷら、餅）を供える。ちなみに焼き魚の種類はタマン（ハマフエフキ：Lethrinus choerorhynchus）であった。また、花米と白紙も供える。

②炭・塩・昆布の俵

祝いの日を示すためには、タンダーラ（炭俵）、マースダーラ（塩俵）、クーダーラ（昆布俵）の3種類を供える。それらは家の建築祝いでも同じように供える。そのため、今回はウヤファーフジの墓（あの世の家）を造りました、と意味を込めている。

③ガニ（蟹）

ガニ（蟹）は、2組の雄と雌を供える。それは墓を造った家の子孫たちが夫婦円満で、子どもも数多く恵まれるようにと意味をもつ。ちなみに蟹の種類は、タイワンガザミ（Portents pelagicus）であった。

④セーター（蝦）

セーター（蝦）は7つの2組を供える。その意味は墓を造った家の子孫たちが謙遜し、年を取っても腰が曲がっても蝦のように元気よく仕事ができ、病気にならないでほしい、と願っている。ちなみに蝦の種類は、クルマエビ（Penaeus japonicus Bate）であった。

⑤ムトウンナ（貝）

ムトウンナ（貝）は7つの2組を供える。その意味は、何年何千年何万年経っても貝

は化石になって形を残す。そのためにマチカニー（墓）もそのように頑丈で後世に残るようにと願いが込められている。ちなみに貝の種類は、アラスジケンマンガイ（*Gafrarium tumidum*）であった。

⑥スーク（アイゴの稚魚）

スークは7つの2組を供える。アイゴ（*Siganus fuscescens*）の稚魚は、総称としてスーク（スクともいう）と呼ぶ。その稚魚は集団でまとまる習性をもつ。古老たちは雄も雌も均等に才能をもつ魚として認識している。そのため、供物の意味はA家の子どもたちが均等に知能と運動の能力をもった万能な人間で生まれてほしい、と願いを込めている。

⑦クーガ（卵）

クーガ（卵）は3つの2組を供える。ちなみに卵は鶏の卵である。その供物は、墓を造った家の子孫たちが卵のような肌の色で美しく、スベスベであり、疥癬がでないように、と意味をもつ。

⑧学問の道具

シミ（墨）、フリ（筆）、チギリ（硯）、シルカビ（白紙）、スルバン（算盤）は、学問の道で名伯楽な人材を生んでほしいと意味が込められている。今の世の中は知能万能の力をつけなければならない。そのため、墓を造った家の子孫たちが世の中に立派な人物として活躍できるように、と意味を含んでいる。

⑨芸能の道具

芸能の道を表現するサンシン（三線）、オウジ（扇）、テークン（太鼓）、六尺棒、モーイ（踊り）などは、墓を造った家の子孫たちが素晴らしい精神をもつ人間になってほしい、と意味が込められている。また、ある人は上手だとか、ある人は下手くそだとか言われず、均等な才能で唄や三線、踊り、太鼓の芸能が立派にできるように、との意味が含まれている。

以上の供物は、風水の理にかなった黄金のようなマチカニーのために供えられた。その後、朝7時頃になると、沖縄の拝みで欠かせない平たいウコー（線香）が準備される。この儀礼に参加している人たちへ火がついているウコーを配る。c氏は15本、B氏は3本の2つ、その他の人たちは3本であった。それぞれの人たちは頭の額に線香を近づけ、感謝の祈りをささげ、その線香を家主b氏へ手渡した。そして、b氏は受け取った線香をウコールイシ（セメントで製作された墓口の四角い香炉）へ置いた。

（3）ウスディークと棒術者などの演舞

ウスディーク・アンマーの5人が墓庭に再度登場する。ウスディークの踊り手たちは、墓庭で反時計回りに7回まわりはじめる。すると、参加者の全員が手を叩きながら、テン

ポをとる(写真1)。そして、その踊り手たちはカチャーシー(祝いの場で踊る手踊り)を踊った。サンシン・ヒチャーは、縁起をつけるため、先ほど墓の玄室で演奏したミフシ(三節)をうたう。その順序は、かぎやで風節、恩納節、中城ハンタ前節であった。また、棒術者による棒術の演武も披露された。その後、棒術者はカチャーシーを踊り、家主のb氏も加わり、一緒に舞った。



写真1 墓庭を7回まわる場面

演舞の結びになると、参加者のサンシン・ヒチャーとウスディーク・アンマーは共に歌いはじめ、「カリユシ、カリユシ、カリーユシ」というウスディークたちの囃子が出てくる。再び、棒術者の演舞とカチャーシーがみられた。

b氏は、「マチカニー・スージーに来て下さって、どうもありがとうございます」と挨拶し、この祝いの閉めとなった。

進行役のa氏は、墓口のヒジャイ(左)でシルカビ(白紙)を焼いた。その行為は「お墓の神様」や「天の神様」、「地盤の神様」などの自然の神へ納める意味であった。a氏によると、その白い紙銭は税金みたいなものだと言明する。そして、進行役の儀礼が終わると、それに続き家主のb氏とその妻のd氏は一緒にマチカニーへ拝んだ。マチカニー・ウガンは、朝7時30分に終了した。

4、自宅での宴

マチカニー・ウガンの参加者たちは、8時頃、A家へ戻ってきた。サンシン・ヒチャーとウスディーク・アンマーは、屋敷の一番座と二番座に座り、墓の新築祝いのために歌やサンシンで演奏し、うたった。ウスディーク・アンマーの囃子で「カリユシ、カリユシ、カリーユシ」が出てくる。

歌や演奏が終わると、墓の新築祝いに参加した人には、A家よりおにぎりや郷土料理のヒージャーシル(山羊汁)、クーブイリチー(乾燥した大根の千切りにしたものと昆布、コンニャクなどが入った炒め物)、酒などがもてなされた。また、c氏の老女は仏壇へサーター・テンプラーやお菓子、水なども供えた。

二、ハル・ジュウコウ

新しい墓を造ったA家は、もともと同姓に所属するイチモン(一門)またはムンチュウ(門中)の父系血縁親族集団がある。その父系血縁親族集団にはウフヤー(本家)の墓がある。その墓は大正初め頃に造られたと考えられる[前田 2011b:38-39]。墓の形式は、亀甲墓である。

ハル・ジュウコウとは、洗骨を伴う墓での焼香である。A家のb氏は、自らの直系にあたるウヤファーフジの厨子（骨蔵器）を本家の墓より取り出し、洗骨によって改葬する。その後、厨子甕は新しい墓へ移動する。それらの一連の作業を行う。

屋慶名村落では、ハルを野原、畑、または墓と称する。ジュウコウは焼香を指す。古老によれば、「ハル・ジュウコウはね、昔は風葬をしたので、ウヤファーフジの骨をシンクチ（洗骨）したわけ。それを墓に納骨して焼香することをいうさ。でも、今では風葬はないけどタナアギ（棚上げ）のときにハル・ジュウコウをするわけさ。」と話す。風葬がなくなった現在でも屋慶名村落では、洗骨の儀礼が残っている。

1、本家のタナアギ

タナアギは、本家の家族のみで行われる。本家は、亀甲墓の墓口を開け、玄室のシルヒラシに安置されている墓のジョーヌバン（墓口の門番をしている先祖、またはモンバンともいう）の御殿型の厨子をタナ（段）に上げる。本家の家族は喪服を着ている。その作業をしなければ、A家のウヤファーフジの厨子を取り出すことができない。

その本家のジョーヌバンの厨子は、数年前に亡くなった女性である。その死者は火葬であった。その厨子を取り出し、骨を洗い、新しい御殿型の厨子へ移す。この儀礼は、引き潮の時間に合わせながら10時40分頃に始めた。

本家以外の者は、墓庭の外で待つ。その本家が準備した供物は、重箱とモチ（3つに重ねたものを3組）、バナナ、ミカン、リンゴ、飲み物（お茶ほか）、ハナグミ（洗った米）、酒などである。

本家の老女は、墓口を開ける前に墓の墓口で線香を置く。そして、ハナグミをウコールイシ（香炉石）の上におき、酒をかけた。そして、墓口が開かれると、11時18分頃に墓庭の外にいたA家の家族がやってくる。

本家の家主は墓の玄室から骨蔵器を取り出し、墓庭へ移動させる。その時は家主の側に青年が立ち並び、片手に黒い傘を広げて持っている。その道具は、葬式や洗骨の儀礼で欠かせない。その理由は、死者が外の光でまぶしいため、日除けで使用する。

ちなみに、墓庭の上には臨時的に大きなブルーシートがおおいかぶされていた。それも日除けである。そのシートの下にはテーブルが設けられ、厨子を置く。そして、待ちかまえていた本家の老女が供養する。また、墓の玄室よりもうひとつの御殿型の厨子を取り出された。それは、ジョーヌバンの死者よりも早く亡くなった夫の厨子であった。これらの骨を洗骨し、新しい御殿型の厨子へ合葬する。

厨子から骨を取り出す時は、順序よく頭の方から順序によく下の骨まで取り出される。テーブルには新聞紙が敷かれていたので、細かい粉までも取り出すことができた。本家の女性たちは泣きながら洗骨していた。

実は洗骨といっても、骨自体を直接布や酒で洗うようにしない。厨子の骨は、火葬されたものなので大きな骨がない。本家の老女は少しでも洗骨の証を示すために酒を少し

ずつかけた。そして、ふたつの遺骨を新しい御殿型の厨子へ夫婦一緒に合葬した。その後は、墓の玄室2段目のタナに安置された。一方、古い厨子は壊し、墓庭の外側へ捨てられた。

2、A家のファーフジー・シンクチ

次は、本家より分家するA家の厨子を取り出す儀礼である。その作業もハル・ジュウコウであり、b氏たちの近い先祖を新しい墓へ移葬するために洗骨が行なわれる。また、それと同時に儀礼の最後には本家の先祖とマチカニーへ感謝の気持ちを込めて拝みも行なわれた。

A家の供物は、重箱、飲み物（お茶、酒ほか）、餅、果物、菓子類、シルカビ、ウチカビ、現金などであった。

本家の墓に持参した新しい御殿型や甕型の厨子は、他の死霊が入らないようにサン（イネ科ススキの葉を結んだもの。呪具としてよく使用されている）が入れられていた。また、それらの厨子には裏返しした着物も被されていた。古老は「昔は、ジーシガミを運ぶ時に、黒い傘をもっている人が隣にいたさ。だけど、黒い傘を使わないときには裏返しした着物の被せるわけ。」と説明する。その方は貴重な傘が入手できないため、直接太陽の光に当たらない工夫でもあった。

A家は、12時35分頃に家主のb氏とc氏、B家の老女（進行役のa氏の妻）が本家の墓の玄室へ入った。その人たちは、これから取り出す祖先の厨子を確認し、タナの一段目に酒とハナグミ、2基の甕型の厨子を置いた。それは、M家の先祖に対して新しい墓へ移動する報告の拝みであった。

しかしながら、洗骨の儀礼と言ってもA家の先祖は第二次世界大戦中にサイパンで亡くなったため、遺骨がなかった。厨子のなかには遺骨の代わりにサンゴの小石が49個納められていた。

墓の玄室では、2基の新しい厨子に子どもの遺骨（サンゴの小石49個）を移していた。その時にc氏は手で死者のマブイ（魂）をすくうようにして、古い厨子から49回出し入れしていた。その行為が終わると、3人はもともと古い厨子があったタナの場所へハナグミと酒をかけていた。

そして、c氏とその息子たちは本家の玄室から大型の厨子を取り出す。A家の洗骨は、墓庭の片隅で行なわれた。4人の男性たち黒い傘を天にさし、日陰をつくった。

さて、その大型の厨子の中はサンゴの小石が49個納められていた。c



写真2 A家の洗骨の場面

氏は新しい御殿型の厨子へサンゴの小石を 49 個移し終えると、マブイも手で 49 回すくい移した。ちなみに遺骨がある先祖は、白いティサージ（タオル）で骨をふきとり、新しい厨子へ移し入れていた（写真2）。A家の先祖が納められていた古い厨子は壊したが、ゴミ処理場へ廃棄した。

3、本家の墓と先祖に対する拝み

A家の洗骨が終わると、本家の墓口は蓋石で閉じた。そして、本家の老女は墓口のウコールイシに火の付いた線香を供える。それは、本家の先祖へジョーヌバンの死者を洗骨し、タナへ安置したことを報告した。供養の供物は、果物や水、重箱、菓子類、現金（香典袋）などであった。

その次は本家の墓から分家したA家の拝みである。それは本家のマチカニーに対して重箱、きなこ餅、酒、ハナグミ、シルカビ（白紙）、100 円玉3つを供えた。

A家の家族は「今まで墓を貸してくれてありがとうございます」という感謝の気持ちを込めて、本家のマチカニーと先祖へ祈願した。とくに現金 100 円玉を供えた理由は謝礼金を意味した。実際にマチカニーには墓口のヒジャイ（左）で白紙を燃やした。また、本家の先祖には、ウチカビ（紙銭）を燃やしていた。それらは、グオン（御恩）の表現であった。

三、先祖の移葬

本家の墓より新しい墓へ移動してきたA家の先祖は、午後3時10分頃に儀礼が始まった。その儀礼には屋慶名村落内の友人・知人も集まり行われた。この儀礼は、一般的に知られているミクチウンチケー（お骨の移葬）に相当する。また、屋慶名村落ではファーフジー・ウンチケーとも呼んでいる。ファーフジーは先祖、ウンチケーは移動させる、または案内するという意味をもつ。その儀礼にはマチカニーに対する祈願と先祖に対する祈願の行為が確認できた。

1、墓に対する祈願

新しい墓には御殿型と甕型の厨子を納める前にマチカニーへ祈願する。この祈願は、今日からA家の先祖と一緒に暮らすことを報告する。A家の本家から分家してきた先祖は別稿を参照されたい [前田 2011b : 51]。先祖の厨子は墓の玄室へ納め、墓口が閉められた。そして、酒と土を使って泥をつくり、墓口の回りをふさぐ。

その際の供物は、白餅を3つに重ねたもの3組（計9つ）、酒、ハナゴメ、100 円玉3つであった。その 100 円玉は、土地代としてマチカニーへ供えた。

2、先祖に対する祈願

A家の子孫がこれからも学問や芸能の道などを広く身につけられるように願って拝まれる。その供物は、白餅9つ、酒、花米、100 円玉3つ、重箱1セット、きなこ餅 15 個、御

祝儀袋であった。また、b氏は納骨された先祖へウチカビを数回焼いた。それに加えてハナグミをB家の老女（進行役のa氏の妻）よりA家のb氏へ手渡していた。しかし、ひとつまみで偶数の米粒がとれないと何度も繰り返した。奇数の米粒がでると、b氏はそのハナグミを頭にかけていた。儀礼の最後は、進行役のa氏がA家のc氏へ餅や天ぷら、ごぼうを手渡し、食べさせた。

3、墓の新築祝い

以上のふたつの儀礼が終わると、午後の墓の新築祝いが開かれる。それは墓庭の外側よりウスディーク・アンマーが来場し、太鼓を打ち鳴らしながらうたった。ちなみにそのアンマーたちは午前中の着物の姿ではなく、日常の洋服で現れた。また、サンシン・ヒチャーや棒術者も加わり、墓庭で演奏と演武が行われる。A家の息子・娘たち3人は、かぎやで風を舞った。ウスディーク・アンマーは、交替ずつカチャーシーを踊った。さらに棒術者もカチャーシーを踊り、祝いに参加している方々も代わる代わるカチャーシーを踊った。一方、墓庭の外では祝いに参加している客へ御馳走や飲み物をもてなししていた。この墓の新築祝いは、墓庭で午後4時30分頃に終わった。

4、火の神と仏壇への祈願

墓から帰宅したA家の家族は墓での祝いに参加できなかった客を迎え、知人・友人、親戚などを含め、夜遅くまで賑やかに行われた。

その合間にc氏は、自宅のウカマガナシーと仏壇の祖先へ無事に墓の新築祝いが終えたことを報告し、感謝を述べていた。それは、午前中に行った拝みと同様であった。仏壇には、3本の線香に火をつけ、ウコールに立てていた。供物は、菓子類、おにぎり、おかず、お茶などがあつた。

おわりに

屋慶名村落においてマチカニーやフンシ・マチカニー、フンシの名称は、墓を意味した。その墓の形式は、主に亀甲墓と破風墓、家型墓である。そして、マチカニーという語は沖縄戦以後にしか聞かないともいう古老がいた。屋慶名村落の亀甲墓と破風墓は、現代から時代をさかのぼってみても、せいぜい1921年以降1940年あたりまでである〔前田2011:49-51〕。おそらく、亀甲墓と破風墓の造営には、石大工やフンシーミー（風水見）などの職人により屋慶名村落の人々へ影響を与えたと考えられる。その代表的な習俗が墓の新築祝いであろう。

今回の報告では、調査の成果を以下の点でまとめてみたい。

まずは新築した墓を名づける儀礼に注目したい。それは名づける前の墓は単なるコンクリートにすぎなかった。しかし、進行役のa氏は墓にマチカニーと名づけることで、A家の先祖とその子孫を守る存在へと変えた。それは墓の誕生ともいふべき、墓の一生が始

まるかのようにであった。また、多くの供物は個々に意味もあり、それをマチカニーへ説明することで、A家の子孫へ反映させるねらいがあった。それは非常に興味深い点であった(註3)。

次に注目する点は、供物の豚肉である。豚肉そのものよりも豚の頭に注目したい。今回の事例では豚の頭を供えなかった。しかし、かつては豚の頭を供えていた。豚を供える理由は邪気を払う意味があった(註4)。

墓の新築祝いには、ウスディークの女性が参加する(写真1)。それが3番目の注目点である。とくに祝いの場にウスディークの歌、囃子、太鼓の音は、宴の場を払い清める意味をもつようだ。かつての青年たちは墓の新築祝いの際に夜通しで墓の玄室で過ごし、夜明けのウスディークの登場と共に墓の後ろへ隠れた。その行為は祝いの場を整える条件に欠かせなかった。ウスディークの踊りは十五夜や旧暦の盆行事だけでなく、祝いの席にも登場する点が勝連半島の特徴と思われる(註5)。

そして、4番目の注目点は、ハル・ジュウコウである。従来、沖縄の葬法は第一次葬の風葬により遺体を骨化させ、第二次葬の洗骨によって改葬した。さらに遺骨は厨子へ納め、墓の玄室のタナへ安置する。その一連の作業を経てきた習俗であった。しかしながら、洗骨は火葬の導入以後に失われた習俗と思われてきたが、A家は先祖の厨子を本家の墓から取り出すため、洗骨を行なった(写真2)。しかも、A家だけでなく、本家の家族もジョーヌバンの先祖を洗骨し、タナへ安置した。それらのタナアギとウンチケーの儀礼は改葬である。南西諸島における洗骨の習俗は、その意味を捉え直す必要がある。

最後の注目は、ヒジャイの存在である。それは、マチカニー・ウガンとハル・ジュウコウの儀礼でヒジャイに対して白紙を焼いた。ヒジャイは墓口にむかって右側に位置し、墓口を開ける前と閉めた後に拝む。とくに屋慶名村落では清明祭で拝むことになっている。一連の儀礼をみることで、マチカニーそのものが墓であり、先祖を見守る役目があり、ヒジャイや土地の神と同様な性格をもつと考えられる。

したがって、今後の調査研究の課題は、首里・那覇・久米の士族層における墓の新築祝いを調査することである。とくに久米系士族の蔡文溥が中国の『朱子家礼』をどのように『四本堂家礼』(1736年)へ取り入れたのか、それをどのように沖縄的習俗に取り込んだかを史料より分析したい。もちろん、沖縄の葬法と墓において仏教的要素は見逃せない課題でもあることを一言附記しておきたい。

【追記】

なお、本報告は1998年度の沖縄国際大学大学院地域文化研究科へ提出した修士論文『沖縄本島中部・屋慶名の葬制』の「第五章 屋慶名における墓の新築祝いの儀礼」を修正・加筆したものである。また、当時資料をまとめるにあたり、下記の諸氏よりご指

導とご助言・ご協力を頂いた。末筆ながら記して深く感謝を申し上げる。

平敷令治（故人・沖縄国際大学名誉教授）、稲福みき子（沖縄国際大学名誉教授）、小熊誠（神奈川大学大学院教授）、山田義夫（元沖縄市教育委員会次長）、宮城利旭（恩納村立博物館長）、宮城昭美（元沖縄市立郷土博物館学芸員）、比嘉義盛（沖縄市文化財保護審議会委員）、稲福政斉（沖縄国際大学非常勤講師）、田端まゆみ（沖縄国際大学民族学ゼミOG）、平良徹也（沖縄県立芸術大学附属研究所共同研究員）。

【註】

- (1) 屋慶名村落における墓の新築祝いについては、1994年調査当時に明治末～昭和初生まれの故人となった平安座蒲安氏、伊禮弘貞氏、伊礼治栄氏、前田治助氏、平良カツ女史、又吉ウト女史、伊計カツ女史、大庭中治氏などよりご教示を頂いた。また、現時点の調査では昭和生まれの久保田正一氏、又吉益弘氏、又吉ハル子女史、久保田進氏などより屋慶名村落の民間伝承について貴重な体験談もご教示頂いた。とくに父・前田伸氏には小動物、植物の方言名やその生態について学ぶことが大きかった。
- (2) 墓の種類は、名嘉真宜勝の分類の「家形墓」であり〔高宮・名嘉真 1975：187〕、現在の屋慶名村落でも広く普及しつつある〔前田 2011b〕。
- (3) 藤井正雄は沖縄における墓の供養のなかで筆や硯などの供物に着目し、以下のよう示唆的な見解を述べている。

仏教の影響はむしろすることができないと思われる。沖縄でも最も影響力のあったのはいうまでもなく真言・禅の二宗である。なかでも禅宗の新墓地開眼供養法は新しい硯に新墨・新筆を用意し、筆に墨を含ませて一円相を描き、点眼作法をもって、俗にいう〈お魂入れ〉ないしく性魂入れ〉を行なうからである〔藤井 1984：327〕。

屋慶名村落では墓の新築祝いを先祖供養と同じように年忌焼香しなければならないと言われている。その習俗は沖縄県下の各地で確認できる〔沢岬字誌編集委員会編 1996：78〕。また、那覇市首里の士族層においても墓の新築祝いやその歌は顕著にみられ、供物の品も定められている。それは首里系士族においてもフンシマチカニという墓の名称があり、ブーサーという一種の拳と5本指を使った宴会場での遊びもあった（1995年に首里系士族の事例について稲福政斉氏よりご教示頂いた）。

- (4) いまや故人となったが、屋慶名村落のムヌシリ（物知り、伝説や習俗などについて良く知っている人をいう）であり、村落の図書館的な役割をもった平安座蒲安氏及び前田治助氏、伊禮弘貞氏、伊礼治栄氏などよりご教示頂いた。かつて、屋慶

名村落では墓の新築祝いの時に豚の頭の肉を食べた後、その頭骨を墓庭などに埋めたと言われている。さらに田端まゆみ女史は1995年に屋慶名村落で行われた墓の新築祝いへ参加し、豚の頭の供物をみている。浜比嘉島では「豚の頭を焚いて持って行き、墓の中で食べ、骨は墓の後に埋める」とされ〔琉球大学民俗研究クラブ編 1962:66〕、津堅島でも「豚の頭は、家にもちかえり、料理をして、頭蓋骨だけを墓に持って行って、墓の裏の北よりに埋める」と言われている〔琉球大学民俗研究クラブ編 1961:44〕。うるま市石川では伊波公園内古墓の玄室の中央で豚の頭骨が出土している〔國吉・石川編 2009:19〕。その時代は、ボージャーの厨子甕に康熙40(1701)年と銘書を確認できる。沖縄県下における近世の墓を発掘する際は、墓の新築祝いなどの痕跡を豚の頭骨及びその他の獣骨へ求めることができるだろう。

- (5) 沖縄のウスディークに詳しい平良徹也氏よりご教示を頂いた。ウスディークは、屋慶名村落以外の地域にも墓の新築祝いへ登場する。それは津堅島〔琉球大学民俗研究クラブ編 1961:43〕、浜比嘉島〔琉球大学民俗研究クラブ編 1962:66〕、平安名村落〔比嘉ほか 1995:19〕などで確認できる。

【参考文献】

- 池原直樹 1984 『沖縄植物野外活用図鑑(低地の植物)』第5巻 新星図書出版
- 上江洲敏夫 1984 『『四本堂家礼』と沖縄民俗——葬礼・喪礼について』『民俗学研究所紀要』第8集 成城大学民俗学研究所
- 小熊誠 1998 「南島文化人類学への誘い——中国から来た風水思想」 沖縄国際大学公開講座委員会編 『南島文化への誘い』 沖縄国際大学公開講座7 那覇出版社
- 久高将邦 1960 「墓の供養」『民俗』第2号 琉球大学民俗研究クラブ
- 窪徳忠 1978 「中国の後土神信仰と沖縄」 窪徳忠編 『沖縄の外來宗教——その受容と変容』 弘文堂
- 國吉康孝・石川耕 2009 『うるま市文化財調査報告書第8集 伊波公園内古墓——伊波公園事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 うるま市教育委員会
- 蔡文高 2001 「洗骨改葬から焼骨改葬へ——豊見城村字高安の葬法の変遷に関する一考察」『常民文化』第24号 成城大学常民文化研究会
- 蔡文溥 1936 「蔡家家憲」 崎浜秀明編 『沖縄旧法制史料集成』第5巻 私家出版
- 桜井徳太郎 1973 『沖縄のシャマニズム』 弘文堂
- 白井祥平 1990 『原色沖縄海中動物生態図鑑(改訂版)』 沖縄教育出版
- 高宮廣衛・名嘉真宜勝 1975 「沖縄の墓地——主として亀甲墓について」 森浩一編 『墓地』 社会思想社

- 沢岬字誌編集委員会編 1996 『字誌たくし』 浦添市字沢岬
- 渡口真清 1968 「土帝君と左」『研究余滴』第11号 郷土史研究会
- 中根千枝 1970 「門中と村落——今帰仁村與那嶺」窪徳忠編『沖縄の社会と習俗』
東京大学出版会
- 比嘉悦子ほか 1995 『祈り——勝連町平安名の歌謡』平安名の昔歌を保存する会
- 比嘉政夫 1999 「門中墓と洗骨儀礼——民俗研究映像『沖縄・糸満の門中行事——神
年頭と門開き——』制作から」『国立歴史民俗博物館研究報告』第82集
国立歴史民俗博物館
- 藤井正雄 1984 「沖縄における墓供養——供物を中心として」竹中信常博士頌寿記念
論文集刊行会編『宗教文化の諸相 竹中信常博士頌寿記念論文集』
山喜房佛書林
- 平敷令治 1984 「他界の家——沖縄本島の墓と厨子」『南島文化研究所所報』第25
号 沖縄国際大学南島文化研究所
1995 『沖縄の祖先祭祀』第一書房
- 前田一舟 2011a 「沖縄本島中部・屋慶名における葬所と墓」『民俗文化研究』第11
号 民俗文化研究所
2011b 「墓の形態とその変遷——沖縄本島中部・屋慶名の事例」『沖縄国際
大学社会文化研究』第12巻第2号 沖縄国際大学
- 琉球大学民俗研究クラブ編 1961 「津堅島民俗調査報告」『民俗』第2号 琉球大学民
俗研究クラブ
1962 「浜比嘉島調査報告」『民俗』第5号 琉球大学民俗
研究クラブ
1970 「勝連村南風原調査報告」『沖縄民俗』第18号 琉
球大学民俗研究クラブ
- 渡邊欣雄 1988 「風水の比較文化誌——東アジアのなかの沖縄風水知識考」窪徳忠
先生沖縄調査20年記念論文集刊行委員会編『沖縄の宗教と民俗』
第一書房